

令和 3 年度

事業所名 : グループホーム ことぶき

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0370901019		
法人名	社会福祉法人 川崎寿松会		
事業所名	グループホーム ことぶき		
所在地	〒029-0202 岩手県一関市川崎町薄衣字久伝 26番地		
自己評価作成日	令和3年10月7日	評価結果市町村受理日	令和3年12月15日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

グループホームことぶきは、スーパーや道の駅がすぐ近くにあり、コロナ禍以前は利用者様と一緒に買い物に出かけていました。また、併設の特別養護老人ホームやデイサービスセンターが同敷地内にあり交流ができます。入浴リフトを導入しており、足の不自由な方でも浴槽に入ることができます。食事は職員の手作りで、利用者様の誕生日にはご希望の献立でお祝いをします。コロナ禍では面会制限や、外出制限が続いているため毎月のケース記録の送付の際には、利用者様の様子を写した写真をカラープリントで添付しています。感染対策をしてリスクの少ない場所へドライブを実施しています。

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/03/index.php?action_kouhyou">https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/03/index.php?action_kouhyou</a>
----------	---

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

事業所は、特別養護老人ホーム「寿松苑」を母体施設として社会福祉法人川崎寿松会の運営するグループホームであり、特養とデイサービスが隣接している。一関市川崎町の中心地にあつて、近接して医療機関やスーパー、道の駅、市役所支所などの公共機関がある利便性の良い地域に立地している。職員は、内外の研修等によって積極的に資格取得・資質向上に努めるとともに、法人の基本理念「人間尊重」の理念のもとに運営方針を定め、利用者の心穏やかな暮らしに安心と尊厳のある時間を過ごしていただくよう一丸で介護サービスに取り組んでいる。過去に何度も水害に見舞われた防災意識の高い地域にあつて、法人全体の総合防災訓練、事業所の水防訓練には多くの地域住民の協力を得て行われている。利用者は、特養やデイサービス施設と交流連携を図る中、地域の文化祭に参画して交流を深め、笑顔の絶えない楽しくのんびりとした毎日を送っている。

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会
所在地	〒020-0871 岩手県盛岡市中ノ橋通2丁目4番16号
訪問調査日	令和3年10月28日

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外に行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない			

令和 3 年度

事業所名 : グループホーム ことぶき

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I.理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	法人全体の理念とグループホーム独自のモットーを、廊下と事務室に掲げて常に意識している。 日々の業務中でも、話し合いを持ち理念・モットーに立ち返るよう努力している。	法人理念を事業所の理念とし、そのもとに運営方針を定めている。職員会議やケアカンファレンス等で、日々のケアの実践を確認しあうなかで、目線と方向性を合わせ、理念の共有と実践に努めている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナ禍以前は交流していたが、コロナ禍になってからは交流していない。	コロナ禍で事業所と地域との交流は軒並み中止になっているが、日々の外気浴や日光浴で外に出た際の挨拶などをしながら、短時間ではあるが親しい交流を続けている。看護学生の実習訪問の際のカルタとりなどで笑顔と元気を取り戻している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	川崎町の文化祭に作品を出展。 川崎地域支援会議に出席し、情報を提供。 入所申し込みにいらした方や、電話での相談にアドバイスや認知症についての情報提供をしている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	コロナ禍以前は行っていたが、令和2年度は紙面報告を5回、川崎市民センターを借り感染予防対策をして1回行った。 前年度に出た意見を参考に、避難時のスロープを購入し、避難訓練などに使用している。	コロナ禍にあっても、書面開催を含め隔月に開催し、いただいた意見は業務に活かしている。委員は自治会長、親交会長、民生委員、支所担当係長で構成し、家族にも出席を呼びかけている。事業所からは都合のつく職員も出席している。利用者の様子を伝える写真を白黒からカラーに変えたところ顔色などが良くわかり好評を得ている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	運営推進会議には市の担当者が出席している。紙面報告も行っている。 川崎地域支援会議に出席し、包括支援センター、社会福祉協議会、民生委員等とも情報交換をしている。	普段の行き来は少ないものの、運営推進会議や2か月ごとに開催される川崎地域支援会議に出席し、市の担当者や医療福祉関係者、民生委員などと情報の交換を行っている。要介護認定申請等の提出書類は、直接、持参している。支所の担当者とは必要の都度相談したりアドバイスを受けたりと、すっかり顔馴染みになっている。	

令和 3 年度

事業所名 : グループホーム ことぶき

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	法人全体の組織の中に「身体拘束禁止委員会」があり、各事業所からメンバーを選出していることから当ホームの職員も毎年入っている。『身体拘束廃止に関する指針』を作成して職員全員に配布し身体拘束をしないケアに取り組んでいる。事故防止、防犯の観点から夜間のみ玄関は施錠している。	「身体拘束禁止委員会」の運営は、法人が一体的に担当し、事業所は委員として委員会に参画し「拘束の廃止」に向けて取り組んでいる。とりわけスピーチロックについては、委員会での意見交換の内容を職員会議で伝え、職員と情報共有しながら実践に繋がるよう取り組んでいる。玄関の施錠は防犯上夜間のみとしている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされないよう注意を払い、防止に努めている	事業所内研修として虐待防止について勉強し、防止に努めている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	成年後見制度の利用の実例はないが、管理者は制度について各種研修で学んでいる。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居時、改定時には口頭、文書にて説明を行い理解・納得を頂いている。不明な点や不安な事はいつでもお答えするように心がけている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営推進会議、面会時、受診時等に意見を聞くようにしている。また、利用者の「〇〇が食べたい。」「〇〇に行きたい。」という意見を反映し、おやつ作りやふるさと訪問ドライブ等を行っている。	自分の意見要望を言葉で伝えることのできる利用者は3名で、他の利用者は顔の表情や身振り手振りを交えて聴くようにしている。家族の意見はコロナ禍前は昼食会や個人面談などの機会があったが、今年は電話で聞くことが多い。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	ことぶき会議、管理者主任者会議等で意見を交換している。	職員の意見は、ことぶき会議(職員会議)や申し送り時だけでなく、職員を2班に分けて意見を聞く機会を設けている。意見の内容は日常のケアに関するものが多く、業務の改善に活かされている。	

令和 3 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム ことぶき

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	人事考課制度を導入しており、自己評価を元に直属上司が評価をしている。 労働時間については、管理者がタイムカード等で労働時間を把握し、時間外労働を極力しないよう努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人全体の組織の中に「OJT推進委員会」があり、各事業所、各職種毎に育成システムが確立されている。オリエンテーションから、1ヶ月、3ヶ月、6ヶ月と段階を経て育成して、その都度、自己評価、面談を通して不安や疑問を取り除きながら、働きながら実践を通してトレーニングをしている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	いわて地域密着型サービス協会に属していて、研修会に参加している。(コロナ感染拡大防止で中止になった) 必要時、電話で情報交換をしている。		
<b>Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入所前の面接調査で不安なこと、要望等を聞きなるべく不安を取り除くようにしている。各関係者からの情報も多く取り、不安解消につなげている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入所申し込みにいらした場合は申込時から、家族が直面している困りごとに、今できる対応や各種サービス・制度の活用、受診の仕方等をアドバイスしている。 入所時には、その時点での不安や要望を聞き、不安解消に努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	面接調査や各関係者からの情報をもとに、初回の施設サービス計画書を作成し支援を行うが、利用者の様子を見ながら臨機応変に対応している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	本人のできる範囲での仕事を用意し、一緒に行くことで「私も役に立っている」という気持ちを、日々の生活の中で持ち続けていただくようにしている。職員はその都度、感謝の気持ちを伝えるようにしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	コロナ禍で面会制限が敷かれているが、感染対策をした上で玄関ガラス越しの面会をしている。職員が会話の仲介をしている。また、定期受診は家族にお願いしている。電話での会話も、耳が遠かったり理解力のない方には職員が仲介をしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コロナ禍で面会ができないため、リモート面会を利用している。	コロナ禍前は敷地内のデイサービスを利用する馴染みの方へ会いに出かけることができたが、今は立ち入ることができない。受診の際に立ち寄った古くからの床屋さんや事業所に来て散髪する床さんを馴染みとする利用者が多い。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	認知症の度合いや、聴力の関係でトラブルや行き違いがあるが、常に職員が側にいて見守り、フォローをしている。様子を見ながら職員が仲介をして関係が改善されるよう働きかけている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	サービス終了の場合は、家族や各関係者と連絡を取り情報提供を行っている。隣接する特養に入所した場合は、様子を伺ったり、ご家族に写真データを譲るなどしている。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	起床や就寝時間など、個人の習慣に合わせて支援している。職員の居室担当を決め、本人の希望する買いものに対応している。誕生日には本人が希望する食事を作り、お祝いをしている。意思表示が難しい利用者には、ご家族のこぼれや思いを反映できるよう努めている。	日々の暮らし方は、あくまで本人本位を基本としている。利用者の平均年齢は84.3歳、平均介護度は3.7と高く、半数以上の利用者が自分の思いを言葉で伝えることができない。お話出来る方からは自宅での暮らし方を聞き取りしながら対応している。好きなことや出来ることには、積極的に参加してもらい、嫌いなことや苦手なことは無理強いしないよう職員間で徹底している。	

令和 3 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム ことぶき

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入所時の面接調査で生活歴を把握し、全職員が理解して支援に当たっている。また、出身世帯以外のご家族から情報を得ることもあり、申し送りノートやミーティングで情報共有している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日々の申し送りや、申し送りノートで毎日確認している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人・家族の意向を確認し、なおかつ職員間で課題を話し合い、本人にとってより良いものになるよう作成している。	介護計画の見直しは、居室担当職員のモニタリングや全ての職員の意見を基本としている。管理者は、6か月毎に居室担当から排泄や食事などの日々の様子を確認し、職員会議で幅広く意見を聞いた上で最終案をまとめている。家族の同意を得て成案としている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々のケア記録は、記録用ソフトを使い入力し記録している。いつもと違うエピソードや表情なども個別に入力記録している。パソコンに入力されている記録は、介護計画書に反映されるものもある。その他、細かい事項は、申し送りノートに記録し、毎日確認している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	家族の都合で受診できない方には、受診や訪問診療の対応、またコロナ禍、電話受診する方には医師への情報提供等に対応した。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	コロナ禍以前は行っていたが、ここ2年は難しい状況。 ドライブで町内のあじさい公園へ出かけた。		

令和 3 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム ことぶき

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	定期受診は、入所前からのかかりつけ医に、基本的にはご家族に受診同行して頂いている。その際、バイタル一覧や健康状態の変化等文書を作成しご家族へ渡し医師へ伝えている。施設への訪問診療や電話受診を利用している利用者もあり、職員が対応している。薬の調整や状態の変化が大きい時には職員が受診同行し医師へ直接説明している。	全ての利用者は、家族同行で入居前からのかかりつけ医で受診している。中には訪問診療を行ってくれるクリニックもある。家族同行の受診に際しては、バイタル等の数値を家族に託している。同じ敷地内にある法人の特養とデイサービスの看護師に気軽に相談できる体制にある。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	訪問看護は利用していいない。不安な時には同法人内他事業所の看護師や病院の看護師に相談することもある。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	入院時の訪問や、家族・医師・看護師と連絡を取り合い病状把握に努めている。 一関市医療と介護の連携マニュアルの中の「くらしのシート」を活用して情報共有をしている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入所時に、ご家族に重度化した場合の意向を確認している。現在、看護師がいない職員体制で重度化対応は難しい。しかし、現に要介護5の方が複数名おり、介護職の負担が大きいのが現状。同法人の特養の入所申し込みをされている方もいる。	事業所での看取りは体制的に困難であることから、利用者が重度化した場合には、家族と納得のゆくまで協議した上で、状態に応じて医療機関への入院又は法人が運営する特養へ移っていただいている。昨年は終末期を迎えた2人の利用者が特養へ移り看取りを行っている。看取りを含む終末期の対応について職員のスキルアップのための研修も検討したいとしている。	看取り実施の如何に関わらず、特養での終末期や看取り対応なども参考としながら、終末期対応に関する事業所職員の研修を重ねていくことを期待する。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	法人全体で定期的に、普通救命講習会を実施しており、グループホーム職員も参加している。毎月、避難訓練を実施している。緊急時対応マニュアルの確認を会議で行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年1回の総合防災訓練(夜間想定)では、地域の方々にも参加して頂き協力体制が築かれている。 水害想定避難訓練には、実際に車に乗って、避難所まで避難する訓練を行っている。 火災・地震想定避難訓練は、毎月行っている。	過去に何度も水害に見舞われている地域のため、住民の防災意識が高く法人全体の総合防災訓練にも多くの住民の協力が得られている。事業所独自にも水害を想定した避難訓練を行い、利用者も近くの小学校へ避難した。また、火災と地震を想定した訓練を毎月行っている。	
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	本人が理解できる言葉でわかりやすく声かけをするように心がけているが、理解できない時や、聞こえにくい利用者にはつい大声で話していることがある。聞こえにくい利用者にはプライバシーにかかわる話をするときには場所を選んだり、筆談をするなど配慮している。	利用者個々の思いや得意なことを生活の中に活かせるよう心掛け、言葉で思いを伝えることのできない利用者とは顔の表情や筆談などでコミュニケーションをとるようにしている。職員の自覚と良識の範囲で対応している。耳の遠い利用者とは大声になりがちな場合もあるが近くで優しく心がけ、誇りやプライバシーには細心の注意を払っている。個人のケース記録等のデータは事務室の目の届きにくい場所に保管している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	食べたいものや、入浴の順番、着るもの等、選べるものは本人に自己決定できるよう働きかけている。外出や動物とのふれあいもできる限り対応している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	業務が優先されることもあるが、食事の時間や入浴するしない等、なるべく個人の希望に添えるよう支援している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	スカーフやバンダナを髪や首に巻く習慣のある利用者には数種類揃えて楽しんで頂くなど、その人の個性が現れるよう支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	昔ながらの食べ物、行事に合わせた食事、誕生日の希望食等を職員が作り提供している。食後の食器洗いや食器拭きは毎日一緒に行っている。	献立は職員が1週間分を作り、日々、調理に当たっている。一部副食は、民間事業者からの宅配を利用し、職員の調理負担を軽減している。利用者は出来る方、好きな方が、食材の下拵えや食器洗いなど片付けの場面で楽しく参加している。おやつは皆で作っている。	

令和 3 年度

事業所名 : グループホーム ことぶき

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	肉類、魚類、野菜、酢の物等まんべんなく食べられるように職員が献立を作成している。特養の管理栄養士に年に2回献立を確認してもらいアドバイスをもらっている。カロリー制限がある利用者には、主治医から指示を仰いでいる。咀嚼・嚥下が困難な利用者には刻み食やミキサー食、トロミ食を提供している。 水分は1人1日1300～1500cc摂取できるように、様々な飲み物をこまめに提供している。 食事、水分ともに摂取量を確認し記録している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	自分の歯がある方は毎食後、歯磨きを実施。声かけ、見守りをしている。また、毎食後、洗面台にお茶を配り、お茶うがい、舌みがきを実施。自分でできない利用者は職員が口腔清拭を行っている。夕食後は、義歯洗浄剤に浸している。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄時間(介助者は量も)をチェックして記録している。排泄パターンを把握して、事前に声かけやトイレ誘導を行い失敗を減らしている。	布パンの1名を除き、他は紙パンツ、おむつ等を使用している。日中はチェック表を活用しながら排泄を促しているが、2名の利用者は介助無しでトイレを使用でき、夜間のポータブルトイレ利用は2名で入居以来変動はない。職員は、失敗しても優しい声がけと対応で、自尊心を傷付けない介助を心掛けている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排便チェックを行い、個々のペースで排便がない方にはそれぞれに処方されている下剤で対応しコントロールしている。 食事で提供するヨーグルトや野菜・根菜類、水分摂取量などに気を付けている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々に合った支援をしている	入浴介助は毎日実施し、利用者は1日おきの入浴。本人の希望や体調に合わせ柔軟に対応している。歩行困難な方でもリフトを使い浴槽に入ることができる。	それぞれに、1日おきの入浴で清潔を保っている。入浴を嫌がる方には、無理強いせず次回や時間を変えて対応している。季節に合わせて「柚子」や「菖蒲」を使ったり、時々音楽を流しながら入浴を楽しむ工夫をしている。普段は口を開かない方が風呂に浸かると職員に話しかけてくる利用者もおり、リラックスした時間を過ごしている。	

令和 3 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム ことぶき

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	食後に休まれる方休まない方、昼寝をする方しない方を把握し、声かけをしている。体調や疲労度を観察し横になって休むよう声をかけることもある。午後はなるべく起きて体操等に参加して頂き、夜の安眠につながるよう支援している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	入居時に何を服用しているか確認し、職員は理解している。受診時、毎回、処方薬の確認をして変更があった場合は、ケース記録と申し送りノートに記入して確認している。個人に合わせ服薬介助をしている。 薬の変更があった場合、その後、必要に応じ医師に状況報告をしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	洗濯物たたみや干し方、食器洗い、食器拭きなどをしてもらうことで張り合いを持っている利用者もいる。能力に応じて用意している。はっとう作りやだんご作り等、昔を思い出しながら皆で行っている。 ドライブや、ふるさと訪問ドライブなども企画している。天気の良い日の日向ぼっこも喜ばれている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。 又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナ禍、面会制限もしているので外出する機会は減っている。定期受診の際、家で昼食を摂ったり、近場で買い物をしてくる場合もある。	コロナ禍で外出の機会が減っているが、6月に遊水地公園、7月はあじさい公園へ利用者全員でドライブを楽しんだ。あじさい公園ではあじさいを背景に笑顔で写真に収まる姿や、ドライブの途中で利用者の自宅周辺を走った時は車窓から見入るように眺めている利用者の姿が見られた。これから紅葉が見頃になり秋のドライブを計画しているところである。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	ご家族様も了解のもとお金を所持している利用者も何名かはいる。その方々も含め、全員分の預かり金を施設で管理している。居室担当者が、買いたいものを頼まれ買ってることが多い。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援している	希望があればいつでも電話がかけられる。介助が必要な方には職員が仲介している。個人で携帯電話を持っている方もおり自由に電話をしている。携帯電話でも介助が必要な時は職員が仲介している。		

令和 3 年度

事業所名 : グループホーム ことぶき

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	食堂の壁面には、町の文化祭に出展した歴代の共同作品を飾っている。また、日々の活動で制作したぬりえやちぎり絵等も飾っている。廊下には、行事等の写真を飾り、通りかかる利用者も足を止め見入っている。食堂の内扉には季節感を表す装飾を心がけている。	ホールには食事兼用の長テーブルと丸テーブルが置かれ奥にテレビと大きめのソファがある。利用者はそれぞれ自分の場所で寛いでいる。キッチンからは利用者の動きが見え食事時の見守りもキッチンで対応できる。壁には文化祭に出品した塗り絵、紙細工等が飾られ天井の吹き抜けから心地よい光が差し込んでいる。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	感染対策で食堂の席を離れたことにより、以前よりスペースは狭くなったが、ソファで一人でくつろいだり、居眠りをしている利用者もいる。誰もいなくなった食堂で一人で過ごされている利用者もいる。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのもをを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居時に使い慣れた家具等持参して頂き、落ち着くような空間作りに努めている。本人の希望で位牌や遺影を居室に置いている方もいる。居室に家族写真や、家族からのプレゼントを飾って居心地よく過ごせるよう心がけている。	居室には、利用者の状態に応じたリクライニングなどのベッドのほか、洗面台、押し入れが設置され、天井には和風の蛍光灯、外側には障子戸があり落ち着いた雰囲気のある部屋造りとなっている。テレビを置き好きな番組を楽しんでいる利用者があるなど居心地よく過ごされている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	居室入り口には本人の名前を表示し、自分で名前を確認して出入りしている。わからない利用者には付き添い介助している。共用のトイレや風呂には、大きく「便所」「風呂場」と表示し理解できる利用者は一人で行くことができている。		